

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

《医療系》

●名古屋市立大学薬学研究科

「薬工融合型ナノメディシン創薬研究者の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

1年目に異分野の講義を受け、2年目に異分野研究体験(インターンシップ)を短期で行ったが、やはり、異分野であることの壁はなかなか大きく、異分野研究体験(インターンシップ)のうまくいった組合せもあったが、多くは刺激にはなりましたがあまり自分の研究へのフィードバックや共同研究への発展にはつながらなかった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

名古屋工業大学、名古屋市立大学という、それぞれ独自の文化で研究や教育が進んできたので当然であるが、両大学・両分野の間でかなりのギャップが顕在化した。学生たちの柔軟な頭と教員側のすくなくからずの努力によって克服できるものと考えていたが、知識や技術はもちろんのこと、様々な環境や哲学があまりにも違うことにあらためて思い知らされた。これがその後のモチベーションの向上や維持にうまくつながらなかったものと思われる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

もう少し早い時期、学部レベルから連携を開始すべきである。1年の教養教育において、名市大・名工大共通科目を設定して、統一化を図ることも効果的かもしれない。例えば、「薬学概論」や「工学概論」のような導入教育も必要であろうし、実習も一部共同で行うことができればハードルもかなり下がってくるのではないかと思う。幸いにも、平成23年度から名古屋工業大学の物質工学科3年(学部)を対象に「薬科学概論」という名古屋市立大学大学院研究科の教員による講義(薬理学、薬物代謝学、薬学経済学)が開講し、100人近い学生が受講をし、好評を得ている。